

# 布施の心

22

## 【長崎工場】

本多 克也

（略字も）

文・徳永 耕一

長崎新聞掲載／全3段(W378×H99)

月日は流れ、一九七一年に開業して以来二十年近くが過ぎていた。

その間必死にもがいて、開業から三年が経った頃から芽が出始めた。そして、糸余曲折はありながらも、年々右肩上がりで伸びて、小さいながらも横浜に本社と工場を構えることができ、社員数も十数名になっていた。

一九八〇年代に入ると、景気は目に見えて上向き、八五年頃からバブルが到来した。株や土地がうなぎ登りに高騰し、ゴルフ会員券も数千万円もするところが現れた。

私はこの頃日本中が踊り狂つて見えた。しかし、私にはそれは無縁で、コツコツと事業に専念した。東京には、吾妻会、長崎県人会などの組織があり、折々に集まりが開かれる。私は、できるだけその集まりに顔を出した。

同郷人と触れ合うと、自然と故郷吾妻町の匂いが漂つてくるし、町の人たちの消息も伝わってくる。県内のいろいろな情勢や情報も聞けるし、母や先生や友のことも思い出されてくる。

故郷を遠く離れた私にとっては、郷人会は楽しい和みの場であり、明日への活力の源でもあった。時には、富崎輝さんや長崎出身の著名な方も姿を見せ、ご挨拶させていただいたり、ご講話を聞かせていただいたり。あるとき、その会合に吾妻町の荒木勘勝（かんじょう）町長がみえて、企業誘致のお説明があった。

私は日頃、なんらかの形で故郷と関わりが持てないかと考えていたので、お話を聞いたとたん、身体に電流が走った。そして、迷うことなく長崎への進出を決めた。



長崎工場

2023年3月本多産業株式会社は  
設立50周年を迎えました。

 本多産業株式会社

【本社】神奈川県横浜市戸塚区戸塚町3814  
TEL:045-869-1133  
【長崎工場】長崎県雲仙市吾妻町布江名677  
TEL:0957-38-3520

「絶好のチャンスだ。ぜひ、長崎へ進出しよう!」一九八九年のことだった。

その後、長崎県との手続きも済んで、企業誘致は本決まりになった。私は「故郷に帰る」ことになったのだ。考えてみれば、一九五六年に家出同然で吾妻町を出たときには、こんな日が来るとは夢にも思わなかつた。私は、自分の幸運さをあらためてひしひと感じた。

いよいよ用地探しになつたとき、町長自らが車に同乗して町内を案内してくれた。

「どこでもよかですかん、気に入つたところがあつたら言つてください」

私たちの車の後ろには町会議員さんたちの車が数台つながり、まるで大名行列のようだつた。道中、チラッと雲仙岳を見やると、心なしか微笑んでいた。岳を見えた。

その夜、懇親会では昔話や今後の計画で座が弾んだ。気に入つた候補地もお伝えして（現工場所在地）、いよいよ工場立地は具体的になつた。

工場用地は、最初は千二百坪だったが、現在では六千坪になつてゐる。

次に重要なのは、人の問題だ。企業誘致をする吾妻町としても、過疎化を食い止めたり漁業離職者を救済するのが目的なので、地元からの採用は最大の関心事だつた。

（※国営諫早湾干拓事業：一九八九年着工して、二〇〇七年に完工した国営最大の干拓事業）

役場の会議室を借りて入社試験を行なつたところ、「募集人員十名」に対しても三十〜四十名の応募があり、人気の高さに驚いた。

しかし、応募してきたのはほとんどが漁業や農業に従事していた方々で、会社勤めの経験もなく、履歴書の書き方すら知らない有り様だった。

（次回4月13日掲載予定）